田瀬理夫さんの仕事とそのむこう

庭を通じて、できること

ランドスケープ・デザイナーとして知られる田瀬理夫さんは、その地域に自生する在来種を選ぶ。多種多様な在来種が植えられた庭は、自然の風景がそのまま凝縮されたようだ。なぜ、在来種なのだろう。そもそも、なんのための庭なのか。田瀬さんの仕事を通してうかがってみた。

たせ・みちお
1949年東京生まれ。73年、千葉大学園芸学部造園学科卒業。富士植木勤務を経て、77年にワークショップ・プランタゴを開設。「アクロス福岡」の空中庭園は代表作のひとつ。

5×緑の緑化ユニット。里山から採取した在来種の植物による植生マット。

家と緑と、そのあいだに。

文・西村佳哲

「美しが丘の家」(設計／永田昌民)では、道路側には前の家に植わっていた木々を。上のレベルは、美しが丘一帯にあった草木で、山をつくるように構成。写真／プランタゴ

なんのための緑？

「緑をきれいに配置することがランドスケープ・デザインじゃあない」と田瀬理夫さんは言う。田瀬さんはそのランドスケープ・デザイナーとして知られているが、本人の自称は造園家だ。こんな話も聞かせてくれた。

「田舎の風景には、地域の農業のあり方がそのままあらわれている。たとえば兼業農家が多い土地では、その内実が風景になる。都市部の街並みについてもこれは同じ話で、人々の暮らしぶりがまちの景観にあらわれているんです」。

だとしたら、その中でデザイナーや造園家の役割は？

「わたしたちが毎日くり返している他愛のないことの積み重ねが文化であり、それが景観をも形づくる。その累積を可能にするのが、自分の仕事だと思っています」。

この言葉は昨年出版された『ひとの居場所をつくる』(筑摩書房)から引用している。約一年間、折にふれて彼の話をききながら書いた本だ。日々くり返される何気ないこと、結果として形づくられる世界の隅々、それを積み重ねていけるようにする…とはどういうことなのか。

「庭」という切り口で聞き直してみようと、あらためてインタビューの時間をいただいた。

田瀬　自分は必ず、その地域で自生している在来の草木を選びます。「在来種も外来種も、同じ緑じゃないか」と思う人がいるかもしれないけれど、植える意味はまったく違う。

たとえば田瀬さんが手がけた上目黒の個人邸では、道路から壁面までの数十cmの空間が立体的に緑化されている(写真66頁・下)。彼は緑化に金網やカゴ、あとアクアソイルという人工土壌の組み合わせを用いることが多い。外壁まわりの土中には配管が埋まっていることも多いし、ここに直に植物を植えて出来ることにはおそらく限りがある。が、その上にカゴを置いて立ち上がりを得ることで、根を張った中低木の植栽が容易になり、カゴの側面も含め、より多様な混植が実現している。人工土壌は無機質なので、植物をゆっくり成長させる性質も持つ。さらにユニット式で施工期間が短くコストも抑えられている。

こうした緑化プロジェクトの数々を田瀬さんと手がけてきたパートナーの一者が「5×緑(ゴバイミドリ)」。代表の宮田生美さんは以前別の仕事をしていたが、約10年前、自宅の庭づくりを田瀬さんにゆだねる機会があり、それをきっかけに今の事業を始めた。

「家を建てることになって、建物は意中の建築家にお願い出来たけれど、まわりの緑をどうすればいいかわからない。旗竿地のアプローチは最初からコンクリートで固められていて、そこを壊して土を入れて…というのは気が遠くなるなと困っていたら、別の仕事でご一緒していた田瀬さんが『やってあげる』と言ってくれたんです。

それでお願いして。塀沿いに少し木を植えるのかな？くらいに思っていたんですけど、『出来たよ』と連絡をもらって見に行って、本当にびっくりしたんですよね。『え。コンクリートは壊していないの？』『こんなに立体的にデザインできるんだ』『施工はわずか3日間だったよね』と」。(写真67頁・下)

宮田さんは「これはすごい」「同じように困っている人はいるはず」と思い立って、田瀬さんが本人の設計案件の中だけで試していた緑化ユニットの資材化と、それを用いた都市緑化事業をスタートさせた。

金網やカゴの使い方が際立って見えるので、田瀬さんの設計の特質はそうした特殊技術にあると思っている人が少なからず

上目黒の個人邸。向かいの家(左写真・右側)の庭を見て、依頼があった。道路からわずか数十cmの空間に、ヤマボウシ、藤、山吹、萩、コナラなど多種の植物が立体的に植栽された。右写真はその植栽前。左写真／プランタゴ。右写真／5×緑

必ず、在来種を選ぶ。庭が在来種で構成されていれば、虫も鳥も裏山や樹林と行き交うことが出来る。在来種を植えるというのは、そういうこと。

いるようだが違うと思う。彼の仕事の本懐は「なんのための緑であり、庭なのか？」という大きな目的というか、目指すところの確かさにあるんじゃないか。

本人が口にした「在来種を選ぶ」という話を入り口に、田瀬理夫さんの仕事のむこうにある考え方や感覚に触れてみたい。

在来植物を選ぶ理由

在来種とは、江戸時代以前から日本に存在する動植物。そして外来種は、人為的に国外から持ち込まれた生物を指す。植物でいえば、シロツメクサ(クローバー)やブタクサ、セイタカアワダチソウなどの帰化植物。

とくに問題になるのは、競争力が高く繁茂して生態系の撹乱を起こす種だ。これは湖に放流されたブラックバスが、日本固有種のタナゴやフナを駆逐してしまう事態と似ている。バスは外見もあきらかに異質だし、在来種を食べてしまうので、実害感がわかりやすく問題として認識されやすい。が、静かな植物の在来／外来は、見た目も一見同じ「緑」だし、その区別など意識したことはないという人が大半だろう。

田瀬さんは「在来の植物を選ぶ」と言う。けど、在来と外来の厳密な線引きは難しそうだし、既存生態系のバランスが損なわれることを問題視するのなら、繁殖力がさほど強くない植物なら外来のものを用いて構わないのか。彼の立ち位置はどのあたりにあるのだろう。

田瀬　どこまでは外来でどこからは在来、といった議論にはあまり興味がない。「イチョウは在来か？」なんて言い始めたら馬鹿みたいだし(中国から100年以上も前に来た外来種)、セイタカアワダチソウのようにはびこってゆくわけではないから、使いたければ使ってもいいだろう。でもわざわざ使うこともないんじゃないか、という立場です。

この10年ちょっと、大きな建築プロジェクトの裏で年に2軒ずつくらい個人邸の庭を手がけてきました。永田昌民さんが設計する住宅の緑をまかされることが多かったのだけど、その中に「ローズガーデンをつくりたい」という方がいました。20坪くらいの大きな敷地があり、その人はバラが好きで、植えて手入れしたいのだという。外来種です。でも、その趣味を奪うわけにはいかないでしょ。だからそのときは、「ローズガーデンは良くないと思う」「でも田舎家風バラ園ならいいでしょう？」と言って、バラのコーナーは庭の3箇所くらいに絞り、僕はその配植には関与しない形をとってあとは無数の在来種で構成した。

竣工した年は、そのバラの足もとにパンジーも植えたりされていたけれど、4年経ったいまはもう植えていない。在来種の植物がどんどん育っていて、春先になると庭中にいろんな花が姿をあらわすわけです。ネジバナとかチゴユリとか、そこが里山だった頃はごく自然にあたりに咲いていただろう植物を100種類くらい植え込んである。年々様相も変わってゆくし、洋物に比べると繊細だけどよく見ると綺麗で。そういうのがパンジーの前に始まってしまいますから(笑)。

外来種については、やっぱり広がってしまうものが良くないんです。見た目も明らかに違って、混ざっていると遠目にすぐわかる。葉っぱも大きいし全体的に青い。在来種の草原は、同じ緑でも黄緑色で明るいんですよ。

話を聞きながら、ある対談で宮崎駿さんが語っていた言葉を思い出した。

「もしジブリの経営がいよい

5×緑・宮田さんの家(設計／永田昌民)。旗竿状の敷地、コンクリートの階段があったアプローチを、人工土壌をいれた植栽カゴで立体的に構成し、植栽した。右は植栽前、中は植栽直後、そして左が現在。写真／米田和久

景色には境界線などなくて、
全部つながっている。
庭にその地域の植物を植えれば、
あたりの季節感や
その場所らしさが増して、
みんな面白くなる。

田瀬さんの代表的な仕事のひとつ、天神のまちなかで山のような「アクロス福岡」（1995年竣工）。14階分の雛壇上に76樹種が植えられたが、植樹や鳥などによる実生で10年後には120種に。また、雨水だけで維持できるよう設計されていて、これまで撒水システムは1度も動かしていないという。写真／内田みえ

よ危なくなったら、『トトロ2』を作ると言ってお金を集めようと（笑）。でもこれはもう出来ません。まず、トトロの緑を描いてくれたスタッフたちが、僕同様にだんだん歳をとっていること。そして、日本の緑の色がすっかり変わってしまったからです。

『トトロ』は東京近郊の田舎とその植物を描くという、たぶん初めての試みでした。そのときはまだ都市近郊でも日本の在来種がいっぱい生えていたんですよ。今ではほとんど帰化植物です。土地をちょっと引っかいた所、宅地開発や畑はもうダメ。除草剤を撒いた所も、すぐに帰化植物が入り込んできます。

だから草むらがあっても、スイッチョンともガチャガチャとも聞こえてこない。在来種が生えていないので、ウマオイもクツワムシもいなくなってしまった。コオロギは鳴いていますけど。東京近郊で在来種が豊かに残っているのは、たぶん皇居と、那須の御用邸のそばの原っぱくらいではないでしょうか」。

（文藝春秋　2013年8月号より）

田瀬　帰化植物が増えると住環境が変わってしまうので、昔からその地域にいた生物が姿を消してゆく。日本の草がないとバッタも棲めないし、チョウチョも飛ばない。虫の鳴き声も無くなってゆくんです。草木の実も変わるから鳥も来なくなる。

でも庭がその土地の在来種で構成されていれば、虫も鳥も、近くの山や5㎞先の樹林とのあいだを行き交うことが出来る。自生種を植えるというのはそういうことなんです。明るい色味の草地がいいとか自分は好きだという話をしてるわけじゃなくて、その土地らしい季節の事々が起きるようになる。季節感は生物が指標になることが多い。「歳時記」って、生き物と植物ですよね。

庭がつなぐもの

日本のように南北に長い島国では、留鳥（地域に一年中いる鳥）に対する渡り鳥の割合が高く約半数を占める。庭に一本の山椒の木を植えたところ、毎年同じ時期に約1週間ジョウビタキが訪れるようになったと喜んでいた人の声も以前耳にした。

じつは、庭は開かれている。

田瀬　人間は土地の上に見えない線を引いているけど、景色には本来境界線などなくて、全部つながっている。

日本の土地は基本的に一つずつ個人に帰属していて、みんなバラバラで、それがさらに細分化されてゆく流れの中にいるわけだけど、そんな中でいま、敷地境界線を越えてデザイン出来るのは緑のほかにないんじゃないでしょうか。

隣と違う家を建てたがる人が多いけど、木や植物は地域に自生しているのと同じものを植えて、それがつながってゆけば、あたりの季節感はより増してゆくし、その場所らしさも掴みやすくなってきて、みんな面白くなる。個人の庭というのは、そんなふうに地域の植生をいかしてゆける空間なんです。

在来種は日本と外国という区分に加えて、国内についても10地域の植生に区分されている。具体的には環境省が「生物多様性国家戦略」の策定過程で発表している図（69頁・下）を参照されたい。

田瀬さんも、その線を越えて植物を動かさないようにしているという。東京の仕事を手がけるときは、その線の内側ないし隣接する関東圏で植物を調達している。

田瀬　地元で採れた種から育てている生産者が全国どこでも必ずいるわけではないので、地域によっては選べるものが限られることもある。だけど同じ樹種だからと言って、たとえば九州の植物を東北に持って来てしまったら、北国で南の虫が鳴き始めてしまう。「既に混ざっているんだから今さらそんなこと言っても」とやってしまったら、もう延々それをつづけてゆくしかなくて、戻りようがない。いくらやってもより駄目になってゆくだけになってしまう。それでは意味がない。それは絶対にしてはいけないことですよね。

かと言って、わざわざ「地域性の樹種でないと駄目だ」と施主を説得するようなことでもない。そんなこと言ってもわからないですよ。僕だってわかんないというか。見分けがつかない。

ある家の庭を手がけたとき、あたりが宅地化する前に広がっていた雑木林のコナラが1本、すごく巨大な木になって自治会館の前に残っていました。足もとで種をたくさん拾ってきて、その家の前庭にも播いておいた。で、後で芽が出て木が育っていったとき「実はそうなんですよ」と振り返ることが出来て、「つながっているんだ」と納得出来ればいい。そんなふうに、平然とやっておけばいいことだと思っています。

こういうことについて僕は専門的な議論はしたくないし、説明はするけど、説得してまで庭をつくりたくはない。庭先の様子を見ていた近所の人から、「同じようにして欲しい」と頼まれるのが理想的です。個人邸の庭の良さはそういうところにある。まちに一つでもあれば、それがつながってゆく可能性があるんです。

都市部はさらに高齢化が進んでゆくし、自分たちでは冠婚葬祭をとりおこなう力もない、それこそ限界集落の定義そのもののようなありさまですよね。でもそこをそうでなくしてゆくには、やっぱり空間が必要だと思います。なにか共同的なもの。皆が「価値がある」と感じていて、互いに保全し合っている空間がいる。

そういうものがないと、現行世代がただ生きているだけ、サバイブしているだけで、時間を越えて将来世代と価値を分かち合ってゆくことは出来ない。

人口が減ってゆく趨勢の中、そんな町や村は握力を失い自然に消えてゆくとして、でもかかわり合って共有しているものがないのに、人口だけはますます増えてゆきそうな都市部の街並みは、どうなってしまうんだろう。

田瀬さんと5×緑が手がけた「武蔵野の森」の味の素スタジアム西競技場「みどりの広場」では、参加者を募って定期的に選択除草が行われている。専門家に区分や見分け方を教わり、外来種を選択して除草。風景が一変する。区別がつきにくい外来種には右写真のようにわかりやすいようタグを付けて。写真／5×緑

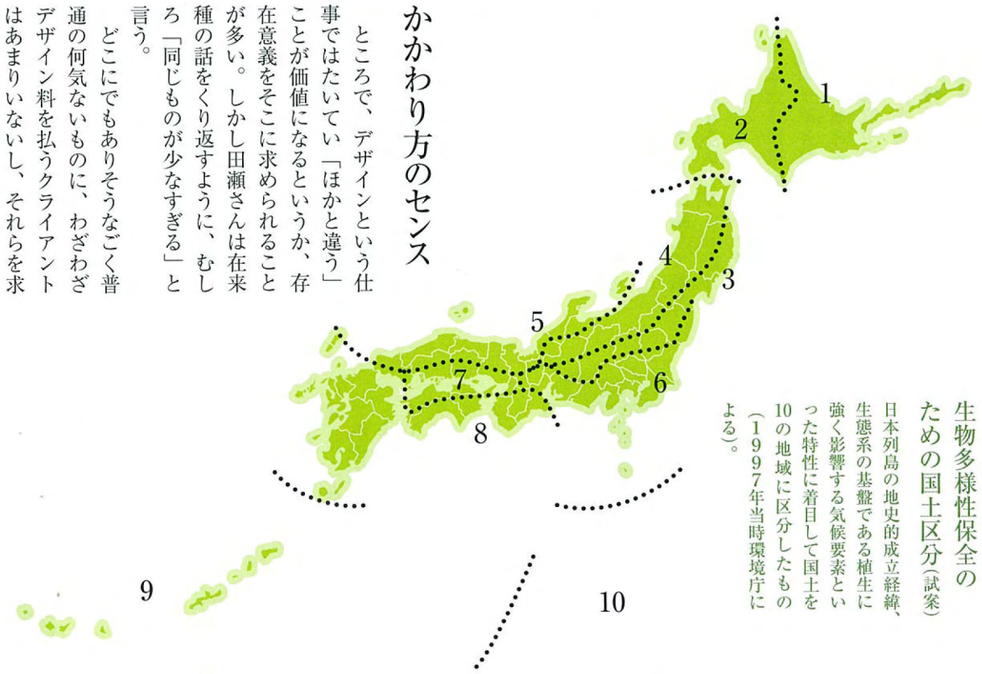
かかわり方のセンス

ところで、デザインという仕事ではたいてい「ほかと違う」ことが価値になるというか、存在意義をそこに求められることが多い。しかし田瀬さんは在来種の話をくり返すように、むしろ「同じものが少なすぎる」と言う。

どこにでもありそうなごく普通の何気ないものに、わざわざデザイン料を払うクライアントはあまりいないし、それらを求めるお客さんもいない。

「商品」なら。

デザインはいわゆる「商品」の付加価値づくりに励みすぎて



生物多様性保全のための国土区分（試案）
日本列島の地史的成立経緯、生態系の基盤である植生に強く影響する気候要素といった特性に着目して国土を10の地域に区分したもの（1997年当時環境庁による）。

狭山ひかり幼稚園（設計／安宅研太郎）の外構では、小さな高低差の吸収や地形づくりが得意な5×緑の緑化ユニットを用いて、隣家との間のブロック塀の足元をかさ上げし、塀の圧迫感を和らげると同時に、園を巡る緑のマウンドをつくり出した。右写真／鳥村鋼一。左写真／masaco

「町の工務店ネット」で提案する「現代町家」の「一坪里山」の事例。外構や内庭など、その地域に自生する草木を植えようというもの。個人の庭は、地域の植生をいかしてゆける空間でもある。写真／プランタゴ http://gendaimachiya.jp/build/hitotsubo/

いるのだろう。別の言い方をすると、世の中の仕事の大半が「買い物」に集中しきってしまっているというか。

しかし街並みは商品ではない。そもそも田瀬さんは自分をデザイナーと称してもいないわけだけれど、ほかにない特異点をこの世界につくり出すことに責任を持とうとしているわけではないのだと思う。では一体なにに責任を持とうとしているのか？という話になるのだけど、自然なことを形にしようとしているのだから、それを進めてゆくときにも肩肘張らずごく自然にやりたいし、やる方がいい、というのが本人の美意識なのであろうことは強く感じられる。

いつも思うのだが、彼は人を説得しようとしない。「僕はあっちに行くよ」とか「こうなっている」とか、三段論法で言えば結論あるいは前提だけを、言葉少なく口にする。自分自身の話に留めているとも言える。少なくとも他人に対して操作的に関与しない。ので、健やかさがある。その姿勢は人にだけでなく、仕事に対しても何においても、全方位で再現性高く見受けられる。植栽についても。これは世界に対する、彼の基本的な態度なのだろう。

田瀬　外来種には、日本の気候や風土に合わなくて病気になりやすかったり、それを防ぐために薬を必要としてしまうものもある。

ゴルフ場の芝がわかりやすいけど、外来の園芸種もそうだし、あとリンゴのような果樹もそうです。そういう植物は、土も変えなければならなかったり、蕾になる前に消毒液をかけておく必要があったりする。お米だって外来種みたいなものだからそれで結構手間がかかる。

でもそんなことは、出来るだけしないで済む方がいいでしょう？

先ほどのローズガーデンのお家も、外の壁沿いにはノイバラが植わっている。これは在来種のバラなので、何もしなくても真っ白な花をきれいに咲かせています。

無理はない方がいい。在来種には、特別なエネルギーを投じなくてもそこで生育しやすい、という良さがある。建築物や緑地は一般消費財に比べて寿命が長く、施設によっては街角にずっと存在するわけだから、付随する緑も無理なくそこに存在していられるものを選ぶのは理に叶っている。

しかしメンテナンス・フリーがいいという話では決してなくて、田瀬さんははっきり「手間はかかる方がいい」と言う。「かけないと駄目だと思う。面倒な方がいいんですよ。愛情がかかったものは〝関係〟を生み出してゆく。そして、年月をかけて丹精込めた形になってゆくわけです」。

手はかける。けど、無理なく自然に月日や仕事を積み重ねてゆけるしつらえをつくる。田瀬さんは、人が価値を蓄積してゆける空間をつくり出すことに、責任を持とうとしているのだと思う。

次々と目先を変えるものでなく、その場限りの仕事や関係でもなくて、積み重ねることで魅力を増してゆくもの。個人の好き嫌いを越えて普遍的に多くの人の気持ちを満たすのは、「人の仕事」というか、「十分な時間」の投入が感じられるものだ。古い時代につくられた大きな建造物しかり、丹念に糸を通して織り込まれたタペストリーしかり。携わった人たちの時間＝いのちが十分に含まれているものというか。

田瀬　みんな、そんなに潤沢にスペースやお金があるわけではなくて、搾り出すように建物を建て、庭をつくっていることが多いと思うんです。

で、同じお金をかけるのなら意味が感じられる方がいいし、長くつづけても飽きない方がいいですよね。庭もそうで、「新しい」も「古い」もない、変わらないことを、ずっとやっていけるようにするのがいいんじゃないかと僕は思うんです。

つくり終わったら後はもうほったらかしのようになることが多い世の中だけど、そうではなくちゃんと手間をかけて、愛着を持ってやっていける仕事のあり方が大事ですよね。

庭づくりのメインは植樹です。それは図面で事細かに指示出来るようなものではないので、一緒に現場に入って、何十種類もの苗木を位置と向きを決めながら僕が地面に置いてゆきます。「この向きで植えて」って。実は、ここが決定的なんですよ。小さな苗木の時点で、内在している枝ぶりはちゃんとわかる。

だけどよほどの植木会社の職人さんでも、ただ植えてしまうんですね。彼らが植えた後を回って「これはこの向きにしないと駄目なんじゃない？」と言うときもある。話は通じるのだけど、任せるとなかなか出来ない。つまり身に付いてない。たぶんバーッと植えたり、バーッと刈り込んでゆくような仕事が多くて、植栽が「自然な感じになる」ことを求められる機会が極端に少ないのだと思う。

いかにも「伐りました」とわかるような剪定は、散髪したてのようで格好悪いじゃないですか。そもそも、伸びすぎたところをただ伐って緑量を減らすような剪定は、植木屋さんのための仕事なんです。枝の数が増えて毎年伐らないといけなくなるし、枝も太くなり木がゴツゴツしてくる。

と聞きながら、この人は、職人も耳を傾けるような植栽技術をどこで身に付けたのだろう？と思った。千葉大造園学科卒業後の勤め先は、富士植木という大手の造園工事会社だったときく。そこで薫陶を受けたんだろうか。

田瀬　いや、僕はなんというか…中学生くらいの頃には、自分の家の庭先にドングリの種とか播いていたんです。

石神井公園の近くに開発された住宅地の平屋に家族で住んでいて、そこは建築協定のような形でどの家にも当初はマサキの生垣が付いていた。で、中学生から大学生の頃、あと勤め始めてからもしばらく、垣根を含む庭の手入れは家族の中で僕の仕事で。

マサキの生垣はまめに手を入れていないと、下が透けてスカスカになる。だから近くの雑木林や山から苗木や草を植え移したりしていた。学校の遠足でも、苔とか松の芽が出たところを持って帰って、一所懸命に水をやってということをずっと。買って来て植えたものはほとんどなかった。

生垣は成長してだんだん混ざっていって、最後は44種類くらいの混植の垣根になり、それは見事なものでしたね。そんなことをやっていたんです。植物の葉っぱの色の違いであるとか、そういう繊細な部分が楽しかったし、自分はとても好きだったんだと思います。

庭を通じて出来ることはなにか。ただ緑を楽しむことではなくて、ささやかな日々の関与、かける手間を積み上げて、増してゆく価値を他の人たちや生き物、そして将来の人たちと分かち合ってゆく。そんな生き方の実現であるということ。

それを可能にする仕事を田瀬さんは、本人が若い頃から日々確かめてきてよく知っている「良さ」を核に形にし、広げ、さまざまな庭や緑地に実を結ばせている。書きながら、人は本当に一本の木のようだな、と思いました。

米・サンフランシスコの街並み。敷地境界線は車道と歩道の間にあり、住民は自分の敷地の前面数メートルを歩道として提供し合っている。結果的にただのプライベートでも行政まかせでもない、中間的な共同の空間が、多様な植栽をともなって街の景色をつくりだしている。写真／西村佳哲

右／5×緑の植生マット（65頁）の施工例。植物は協働関係にある里山の林業者が復元性を保ちつつ採取。含まれる種はマットごとに異なる。また、植生のかく乱を防ぐため流通地域を限定。左／手前は金網パネルで構成したギャビオンライト（庭園灯）、奥はグラスダイヤモンドメッシュフェンス。つる性の植物と合わせて、様々な場所での緑化を実現。5×緑 Tel.03-3280-2041 http://www.5bai midori.com

手間はかかる方がいい。
愛情がかかったものは、
関係を生み出してゆく。
年月をかけて丹精込めた
形になってゆく。

にしむら・よしあき
1964年東京生まれ。武蔵野美術大学卒業。建築分野を経て、「つくる」「書く」「教える」仕事にたずさわる。『ひとの居場所をつくる』（筑摩書房の他、『自分の仕事をつくる』（晶文社/ちくま文庫）、『かかわり方のまなび方』（筑摩書房）、『いま、地方で生きるということ』（ミシマ社）など著書多数。
http://livingworld.net/

編集協力・内田みえ